

手術

小酒井不木

青空文庫

×月×日、私の宅で、「探偵趣味の会」の例会を開きました。随分暑い晩でしたが、でも、集ったのは男の人が五人、女の人が三人、私を加えて都合九人、薄暗い電燈の光の下で、鯰なますの血のような色をした西瓜をかじり乍らなが、はじめは、犯罪や幽霊に関するとりとめもない話を致しました。

「……それにしても九人というのは面白いですねえ。西洋の伝説にある妖婆ようばは、九という数を非常に好むという話ですから」と、会社員で西洋文学通のN氏は言い出しました。いつの間にか私たちは怪談気分にはたつて居たこととて、妖婆という言葉が、いつもより物凄く私の胸に響きました。

N氏は続けました。「シエクスピアのマクベス劇で、三人の妖婆が魔薬を煮るところは可なり恐しい思いをさせられます。その魔薬の成分の一つとして、子豚こぶたを九疋ひき食った牝豚の血が、鍋の中へ入れられますが、あの無邪気に見える豚でも、共食いするかと思うと、何となく気味の悪いものですねえ……」

こういつてN氏は、私たち九人が、恰あたかも九疋ひきの子豚こぶたで、今にも牝豚ならぬ妖婆が、私たちを食べにでも来そうな雰囲気を作り出しました。

この時、弁護士のS氏は言いました。「どうです、いま、共食いの話が出た序ついでに、今晚は、人間の共食いを話題としようではありませんか」

「いい題だいもく目です。皆さんどうです？」と私が申しました。

「大賛成！」「結構ですわ！」と皆々同意されましたので、私は申しました。

「先ずか隗いより始めよということがありますから、最初にSさんに御願ごんい致いたしましょう」

S氏は頭を搔かいて、「どうも、とんだことを言い出いしましたねえ」といい乍ながら、でも、すなおに話し始めました。法律家であるだけに、穂積博士の「隠居論」に載のって居る食人の例をよく記憶して居られて、老人隠居の風習の起りは「食人俗」にあることまで、極めて秩序的に説明してくれました。

それから、私が話す番になつたので、私は変態性慾と食人との関係について色々の例を述べて説明しました。恋人を殺してその心臓を切り出し、それを粉碎して、パンの中に焼き込んで食べた男の話などは、いつもならば何ともありませんが、今夜に限かぎって、自分ながら妙な気持になり、外から盗人のようにはいつて来るなまぬるい風さえ、血ちなまぐさ腥しんい臭くさいを持つて居るかのように、思われました。

次に大衆文芸作家K氏の日本文学にあらわれた食人の話があり、それについて、男の方

も女の方もそれぞれ、凄^ひい、面白^{おもしろ}い話をされ、最後にC子さんの番になりました。C子さんは数年前まで看護婦をして居られたのですが、故^{ゆえ}あつて今はタイピストをして居られま^すす。

「それでは、今度はC子さんに御願^{ごん}い致^{いた}しましょう」と私が申しますと、C子さんは、何故^なか先刻^{さつき}から二三度太息^{ためいき}をついて居られましたが、この時、決心したように言いました。「思い切つて御話することに致^{いた}しましょう。実は私が看護婦をやめましたのも、ある御方の食人が動機となつたので御座^まいます。でも、この御話は、普通の女の方の前では、何だか、申しにくいところがありますから……」

「いえ、かまいません。どうぞ是非話して頂^{ちようだい}戴^{だい}」と他の二人の女の方が口を揃えて、熱心に申しましたので、C子さんは、「それでは」といつてしずかに話しはじめました。

その時、ふと私が明け放した座敷から、おもてを見ますと、蝸^{さそりぎ}座の星が常よりも鋭く輝いて、はや、西南の空の地平線に近いところへ移つて居ました。

△△医科大学が、まだ△△医学専門学校と申しました時分のこと御座^まいます、私は、

産婦人科教室の看護婦を勤めて居りましたが、患者の受持ではなく、手術場を受け持つて、手術の際に、ガーゼを渡したり手術道具を渡したりする役を致して居りました。

主任教授はT先生と申しまして、その頃は四十前後の、まだ独身で御座いましたが、産婦人科の手術にかけては日本でも有数の御方で、その上弁舌に巧みでいらつしやいましたから、学校内は勿論世間でも大へん評判が宜しゅう御座いました。いくら名医と申しましたも、やはり人間である以上誤診ということは免れ得ませんが、T先生は平素、念には念を入れる性質でしたから、滅多に誤診はなく、たまたまあつても、患者の生命に少しの影響をも及ぼしませんでした。

ところがそのT先生が、どうしたとか、まあ、いわば、悪魔にでも憑かれなされたのでしよう、たつた一度だけ、世にも恐ろしい誤診をなさったので御座います。それがため、先生は遂にその身を亡ぼしてしまわれ、私も看護婦という職業を捨てたので御座います。それはある夏のことでした。毎年、夏期には、教室で、産婦人科学の講習会が開かれますが、その年も凡そ二十五六人の聴講生が御座いました。聴講生と言いますが、みな、市内や近在に開業して居られる方ばかりで、どなたも相当な経験を積んで見えますから、T先生も殊更に注意をせられて、手術の時など、私たちの準備を嚴重に監督なさいまし

た。

ある日、T先生は、子宮纖維腫しきゆうせんいしゅの患者に、子宮剔てきしゆつ出手術を施して講習生に示されることになりました。その患者は二十五歳の未婚の婦人でしたが三ヶ月ほど前から月のものがとまり、段々衰弱して来たので、先生の診察を受けたところ、子宮の内壁に纖維腫が出来て居るから、子宮を全部剔出しなければならぬとの事で、患者も覚悟をきめて、その大手術を受けることになりました。

御承知でも御座いまいしうが、子宮を剔出するには腹部から致しますのと、局部から致しますのと二通りの方法が御座います。T先生は、講習生に示す関係上、後の方法を御選えんびになりましたので私どもはその準備を致しました。手術室は、中央に手術台が置かれ、その手術台のまわりに凡そ一間半ほど隔てて、生徒たちの見学する台が、手術を見易やすくするため、ちようど、昔のローマの劇場のように、一段々後ろへ高くなって備えつけられてあります。で、二十数人の講習生は其処そこへ半円形に陣取って、先生の臨床講義の始まるのを待つて居りました。

最初に先生は、当の患者を連れて来て、一通りその病歴を御話しになり、子宮纖維腫と診断なされた理由を、いつもの通りの、齒切れのよい、流暢りゆうちやうな言葉で御述べになりま

した。凡そ半時間ほど説明をなさつて、患者を別室に退かせになりました。即ち、その別室で、患者に麻酔剤を与え、患者が十分麻酔した頃に、手術室に運んで、手術を受けさせるという順序で御座います。

やがて患者は手術室に運ばれて来ました。患者が手術台に乗りますと、私は大へん忙せわしくなるので御座います。先生も助手の方々も、白いキャップを御かぶりになり、口にも白いマスクをかけて手術に取りかかられるのが例で御座います。先ず、助手の方々によつて、手術局部の嚴重な消毒が行われますと、愈いよいよ々先生は手術に取りかかるために、特別な手術道具で、子宮を出来るだけ手前へ引き出しになりまして、順序として、指で丁寧に患部を触れて御覧になりました。

もとより、その間も先生は、聴講生に向つて、熱心に説明して居られました。私にはよくわかりませんでした。子宮繊維腫の出来たときには、子宮は林檎りんごのようにかたくなるのが特徴であるということを繰返し説明なさつたようでした。

ところが、暫しばらく触診をなさつておいでになりますと、先生の御言葉が段々乱れてまいりまして遂には、ぱたりと口を噤つぶんでしまわれました。そして、ちやうど顕微鏡を御のぞきになるように、眼を近づけて、さらけ出されたものを、触診しながら、見つめて居られま

した。と、見る見るうちに先生の御顔に疑惑の色がただよい、その額にはオリーブ油のよ
うな汗の玉が、ぎっしり並び始めました。恐らく先生はその時、夏の晩方、石だと思つて
掴んだのが、臺であつたときのような感覚をされたことだろうと思ひます。と申しますの
は、患者の子宮は先生の予期に反して、先生が指で御つまみになると、空気の抜けかけた
ゴム鞆のようにくぼみましたからです。講習生の人々は、何事が起きたのかと、ちようど、
軍鶏が自分の卵ほどの 蝸牛 を投げ与えられた時のように、首をのぼし傾けて、息を凝
らして見つめました。

御承知の通り、手術室には、塵埃は至つて少ないのですが、その時には、一つ一つの塵
埃が、石床の上に落ちる音が聞えるかと思われるほど、静かになりました。やがて先生
の手は少しく顫えかけました。すると、先生は何事かを決心されたかのように、でも、何
事も仰しやらずに、つと、子宮の中へ指を入れて、血のついた白みがかつた塊をつかみ出
されました。が、それは、ほんの一瞬間のことで、先生はその塊を右の掌の中へしつかり
握りこんでしまわれました。講習生の方々は勿論、恐らく助手の方々も、それが何であつ
たかは御承知なく、やはり、子宮の中に出て来た病的の腫物だと思つて居られたらしいので
す。

けれど、けれど。

私は、不幸にも、その何物であるかを見てしまったのです。それは或は私の錯覚であつたかも知れません。いえ、錯覚であらせたいと今でも思つて居ります。然し、兎に角、その時、私の眼に映じましたのは、小さい乍らも人間の形を具えた三ヶ月ほどの胎児でありました。私はぞつと致しました。急にあたりがまっ暗になつて、今にもたおれるかと思いましたが、その時、先生が、この世ならぬ声で、主席助手の方に向つて言われた御言葉ではつと我にかえりました。

「もう、手術はすんだ。後始末をしてくれたまえ」

こういわれたかと思うと、先生は血まみれの手に、その疑問の組織をかたく握つたまま、私たちを残して、さつさと出て行つてしまわれました。子宮剔出の手術は？　？　？　講習生の方々は、催眠術にでもかけられたようにぼんやりした顔をして見えました。

暫らくすると、患者の子宮から、はげしい出血がありました。主席助手の方は、極めて落ついた性質でしたから、応急の手当を施されましたが、どうしても血が止まりませんので、私に、T先生を呼んでこいと仰しやいました。私は、先刻からの心の打撃に、ふらふらして居た矢先ですからまるで夢中になつて先生の御室にかけつけましたが、T先生は御

いではなりません。で、産婦人科教室に属するすべての室を、一つ残らず捜して行き、最後に、建物のつき当りにある図書室に行きますと、T先生は手に血のついたまま、机よりにかかつて、ある書物を見つめておいでになりましたが、私の蹺音あしおとをきくなり、その頭をむっくり上げて、私の方を向いてニツと御笑いになりました。

ああ、その時のT先生の御顔！

先生の口許にはべつたり血がついて居りましたが、そればかりでなく先生の齒齦はぐきと齒とは真紅まっかに染まって、ちようど絵にかかれた鬼の口をまのあたりに見るようで御座いました。はつと思うと気が遠くなって、私は図書室の入口にたおれてしまったのです……

ここでC子さんは、暫らく話を中絶させました。私たちは固唾かたうを呑んで、その続きを待ち構えました。

「私の御話というのはこれだけで御座います。その患者はその夜、衰弱のため死亡致しました。先生はそれから長い間精神科の病室にはいつて居られましたが、先年インフルエンザの流行はやった時、肺炎にかかつて寂しく死んで行かれました。

で、最後に残る問題は、T先生が患者の腹から胎児を御取り出しになったことも、T先生しの口の中が真紅まっかであったことも、果して私の錯覚であったかどうかということです。然しか

したとい先生の御取り出しになったのが、胎児でなかったとしても、T先生が誤診なされたことは事実でありますしなお又、先生が、その疑問の組織のやり場に困って、最も安全な隠し場所として、御自分の胃袋を御選びになったことも、やはりたしかであると思つて居るので御座います。

このことがありましてから、私は看護婦という職業に厭いや気がさして、現在の職業に移つたので御座います……」

(『新青年』一九二五年十月)

青空文庫情報

底本：「現代怪奇小説集 中島河太郎・紀田順一郎編」立風書房

1988（昭和63）年7月10日第1刷発行

初出：「新青年」

1925（大正14）年10月号

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

入力：藤真新一

校正：柳沢成雄

2002年10月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

手術

小酒井不木

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>